オーラル・ヒストリーと教育

槇原　茂 *

Shigeru MAKIHARA *

Oral History and Education

はじめに

「世代間コミュニケーションと教育」という共通テーマに、歴史学からどのようなアプローチができるのか。最初に、この問いに対する筆者なりの答えを示しておきたい。

歴史学[1]においては、「世代」に関しても、「コミュニケーション」に関しても、それなりの先行研究を挙げうる。「世代」に関する研究は、カール・マンハイム『世代論』を生んだドイツでもっとも盛んであるといってよい[2]。とくに第二帝政期からヴァイマル期を経てナチスドイツにいたる現代史研究では、青年運動や世代間対立は時代分析のキー概念の一つとして重視されてきた[3]。また、「コミュニケーション」に関しても、前川和也編著『コミュニケーションの社会史』（2001年）をはじめ幾つかの先駆的な研究を参照できる[4]。メディア論、公共性論を踏まえたアプローチが多いといえよう。

しかし「世代間コミュニケーション」となると、歴史学においてもそれ自体をテーマに掲げた論考はまったくないように思われる。序文で述べたように、「世代間コミュニケーション」概念には曖昧さがつきまとうので、個別研究においてはより限定的なテーマ、対象として措定されざるを得ないであろう。たとえば村上宏昭は、ヴァイマル共和国における第一次世界大戦の「語り」をめぐる「世代間抗争」、つまり「前線世代」と、それに続く「戦時青年世代」との対立を論じている[5]。この論考は、序文のいう「世代間コミュニケーション」の第２領域に分類できよう。他方、たとえば教育史において宮澤康人が着目する「大人と子供の関係史」（後述）は、「世代間コミュニケーション」の第１領域に位置することになる[6]。歴史学において「世代間コミュニケーション」に焦点を合わせた研究となると、これら二つの領域にかかわる動向が指摘できるのではなかろうか。ここでさらに、「教育」という要素を考慮に入れ、歴史学において共通テーマにより近い領域を選ぶとすれば、「大人と子供の世代間関係」におけるコミュニケーションということになりそうである。

本稿では、以上の前提に立って、「大人と子供の世代間関係」におけるコミュニケーションの一形態としてのオーラル・ヒストリーoral historyを考察の対象にする。最初に、オーラル・ヒストリーの定義に関する諸説を検討し、欧米と日本の研究史を概観したあと、「大人と子供の関係史」の観点から、筆者の専門とするフランス近代史における口承文化oral cultureと教育の関係について考察する。それらを踏まえて、オーラル・ヒストリーの、学校教育での活用の可能性について論じたい。

１　オーラル・ヒストリーとは何か

(1)オーラル・ヒストリーの定義

オーラル・ヒストリーに関する入門書や研究書を読めば読むほど、「オーラル・ヒストリーとは何か」という問いに回答するのが難しくなる。何をもって「オーラル・ヒストリー」の本質的要素とするのかが論者によって異なっており、そのようないわば融通無碍な性質がむしろ「オーラル・ヒストリー」の魅力と活力を生んでいるように思われるからである。とはいえ、議論を進めていくためには、代表的な定義をいくつかとりあげておかなくてはならない。

①「オーラル・ヒストリーとは、一般に、現存の人々からの過去の体験の聞き取りおよびそれを文字で表した聞き書きのことである。とくに、文字史料が残されず、口伝・口述によってのみ事実が明らかになるような場合、オーラル・ヒストリーの有効性は大きくなる。[7]」（広川禎秀）〔下線は槇原〕

②「記述史料よりむしろ現存の人びとから聴取した証言をもとに書かれた歴史[8]」（ゲイン・プリンス）〔下線は槇原〕

両者の定義から、「オーラル・ヒストリー」には、「聴取された証言」と「聴取された証言をもとに書かれた歴史」の二重の意味があることがわかる。また後者の定義を、さらに踏み込んで、③のように録音と書き起こしという手段を用いるかどうかを定義の要素にしている例もある。

③「大きく分けて、オーラル・ヒストリーには狭義の定義と広義の定義があると言えよう。一つは、オーラル・ヒストリーとはテクノロジーの進歩によって発達した録音機器を用いて、人々にその経験を聞き、録音して、書き起こした史料を基に歴史を描いていく手法であるとい

* 島根大学教育学部共生社会教育講座

う定義である。他方、オーラル・ヒストリーの定義を広くとらえ、必ずしも録音にこだわらないで、広く人々の語りの意味を歴史的・社会的に、さらには時には心理学的に考察していくこと、特に集団的な記憶に焦点をあてて、記憶の政治性等について考察していく手法をオーラル・ヒストリーという場合もある。もちろん、両者は厳密に分けられるものではないが、本書は前者の立場に立ち、録音史料によって歴史を考察し、書いていくための具体的手法を扱う。[9]」（酒井順子）

他方で、聞き取りの対象を明確にした定義④もある。

④「公人の、専門家による、万人のための口述記録[10]」（御厨貴）。

「公人」とはだれで、なぜ彼らの証言を記録するのかについては、「社会に公的な影響力をもつ政治家、官僚、企業家などの『公人』は、社会に対する『説明責任』を負う。したがって同時に、『情報の公開性』と『決定の透明性』が問われている。しかも彼らは、同時代としての『現代』と、やがて時をへて後世に判断が委ねられる『歴史』、これら双方の説明要求に応えなければならない。今、政治や行政の現場で話題の『政策評価』や『自己評価』も煎じつめていえば、オーラル・ヒストリーの実践にたどりつくだろう。[11]」〔下線は槇原〕とされている。

歴史研究および歴史叙述が、「公人」であろうとなかろうと、広く過去に生きた人間を対象としてきたことに鑑みれば、あえてこのように対象を限定する必然性はないといえよう。むしろ研究史を振り返れば、オーラル・ヒストリーは文字史料を残さなかった人びとや文書史料に残りにくかった人びとの歴史を掘り起こすために利用され、開発された方法であり、その歴史を叙述した作品をも意味することの方が一般的であった。またわが国でも、「オーラル・ヒストリー」の術語こそ1970年代以降に普及しはじめたとはいえ、それ以前から柳田国男や宮本常一らにより口頭伝承や聞き取りにもとづくすぐれた作品が生み出されてきた。それらの多くは常民、庶民の語りを収録していた[12]。

④の提案者である御厨貴もこのような事情は了解した上で、あえて限定的な定義をおこなっている。彼によれば、「オーラル・ヒストリーはデモクラシーの発展に見合ったダイナミズムをもち、情報公開と政策決定プロセスの透明化に必ずや貢献する[13]」との確信のもとに、組織的な収集によるアーカイブ構築がおこなわれている。したがって、はじめに明確な目的があり、それに合わせて設定された「定義」ということになる。

教育との関連性を視野に入れた本稿では、①と②の定義を前提として、とくにイギリスの代表的なオーラル・ヒストリー研究者であるポール・トンプソンによる意義づけを、以下の行論の参考にしたい。

「オーラル・ヒストリーは、人々の周りで構成される歴史である。オーラル・ヒストリーは人生を歴史それ自体に組み込んでいくことであり、歴史の範囲を広げていくものである。オーラル・ヒストリーは英雄を指導者から見出すのではなく、社会の大多数を構成する無名の人々の中に見出すものである。オーラル・ヒストリーは教師と学生が研究仲間となることを励ますものである。オーラル・ヒストリーは歴史をコミュニティーの中に持ち込み、コミュニティーの中から歴史を描き出す。オーラル・ヒストリーは特権をあまりもたない人々、特に年老いた人々が尊厳と自信をもつのを助ける。オーラル・ヒストリーは社会階級間、世代間の接触を生み出し、そこから相互理解が生まれる。個人の歴史家と他の人々が、意味を共有することによって、一つの場所あるいは時代に所属する感覚を育てることができる。一言で言うならば、オーラル・ヒストリーはより全的な人間を生み出すのである。また、オーラル・ヒストリーは既存の歴史神話、伝統から受け継がれた権威的な判断への挑戦を意味する。つまりオーラル・ヒストリーとは、歴史の社会的な意味を根底的に転換する手段を提供するものなのである。[14]」

(2)研究史

○欧米における研究動向

欧米の研究史については、トンプソンやプリンスの書を参照することにより、概要を掴むことができる[15]。まず、いずれの論者においても、ドイツのレオポルト・フォン・ランケにはじまる近代歴史学によって、口述史料が軽視もしくは無視されるようになったことが指摘されている。これは、記録された文書（記述史料）の批判と分析によって明らかにされる「事実」こそ歴史であるとする実証主義的歴史学において、口述のデータは「次善の策ないしはそれ以下のもの[16]」とみなされたからである。19世紀前半には、フランスのジュール・ミシュレやイギリスのトマス・マコーリーのように、口述史料の価値を認め、叙述に活かした歴史家がいたのであるが、その後、口承伝統や個人的回想の聞き取りへの関心は、おもに歴史学以外の分野に引きとられた。19世紀のとくに中葉以降には、ドイツやスカンディナヴィア諸国でロマン主義の興隆とともに発展した民俗学において民間伝承の収集がさかんに行われ、あるいはイギリスのチャールズ・ブースやウェッブ夫妻らによる社会調査・労働階級調査が口述の証言を精力的に採録した。また20世紀に入り両大戦間期になると、社会学の分野で、アメリカのシカゴ学派が聞き取り調査にもとづくライフ・ストーリー研究に取り組んだ。

歴史学においてオーラル・ヒストリーが復権するのは、第二次世界大戦後のことである。そのおもな要因として、大戦後にアフリカの脱植民地化が進むなか、長らく「歴史を欠いた世界」（ヘーゲル）とされてきた大陸の歴史への関心が高まったことが挙げられる。オーラル・ヒストリーの研究史で必ずと言ってよいほど取り上げられるヤン・ファンシーナの古典的研究『口頭伝承：歴史方法論研究』（1965年）[17]は、口頭伝承によって幾世代にもわたり継承されてきたルワンダやブルンジの王国の歴史について考察したものであった。すでにエドワード・エヴァンズ=プリチャードが先鞭をつけていたアフリカの口承の歴史は、人類学の対象としても、戦後多くの研究者を惹きつけることになった。

一方、アメリカ合衆国では1948年から、コロンビア大学のアラン・ネヴィンズのイニシアチヴの下、政治家や実業家、科学者など社会的に影響力があると目された人物の聞き取りと録音がはじめられ、今日「コロンビア大学オーラルヒストリー・コレクション」として知られる膨大な口述史料集の基礎がつくられた[18]。アメリカのオーラル・ヒストリーが政治史中心であったのに対し、スカンディナヴィア諸国では民俗学的な関心から民話やライフ・ストーリーの収集調査がいっそう広範かつ組織的に進められ、イギリスでは1960年代から労働史や農村史の分野で口述史料の収集が盛んになった。アメリカでも1970年代あたりから、民俗学、あるいは先住民史や黒人史、女性史研究の台頭とともに、新たにオーラル・ヒストリーへの関心が広がった。これら欧米の動向は、都市や工業地帯もふくめ、地域史の開拓にもつながり、後述のコミュニティにおけるプロジェクトとして組織的にインタヴューがおこなわれる例も増えた。

全般的に、戦後の欧米のオーラル・ヒストリー研究は、特定分野の専門家だけでなく、広く市民の参加と協力を得ながら推進されてきた点に特徴があるといえよう。これら普通の市民によって語られたり、収集されたりした過去のなかから、地域史の掘り起こしにつながる記憶のほか、極限状態の辛い記憶、つまり戦争や虐殺が主題となってよみがえることも多かった。ホロコーストの体験者の証言を映像とともに記録したクロード・ランズマンの『ショアー』(1985年)は別格としても、ユダヤ人虐殺、空襲、パルチザン、銃後の生活などの証言もオーラル・ヒストリーの重要なテーマであった[19]。

○日本における研究動向

わが国でも、近年戦争の歴史をめぐるオーラル・ヒストリーはしだいに多くの人びとの関心を集めるようになっている。アジア・太平洋戦争の記憶の変遷を論じた油井大三郎によれば、1980年代頃から「記憶」に対する関心が高まった要因として、エリック・ホブズボームやベネディクト・アンダーソンらの研究が端緒となって、ナショナリズムを「歴史的かつ社会的に構築されたもの」とする観点が広まり、記念碑・記念日や博物館など過去の記憶を媒介する事物に関する研究が増えたことがあげられている。加えて、すでに老年に至った戦争体験者が「沈黙したまま死を迎えることに疑問を感じ、三〇年から四〇年の歳月を経て、重い口を開いてゆく例が多くみられるようになったとされる[20]。「いわゆる『従軍慰安婦』にさせられた朝鮮や中国、東南アジアの女性たち」が例にあがっているように、油井の指摘は日本に限定されたものではないとはいえ、わが国のオーラル・ヒストリーが戦争の体験とその記憶を主要な対象にしてきたことは間違いない。この傾向は、戦争体験の風化をおそれる戦後世代もふくめた研究者や市民たちの問題意識にも促されていたといえる[21]。

歴史学においては、『歴史学研究』がこれまで二度ほどオーラル・ヒストリーに関する特集を組んでいる。最初が1987年のことであり、中村政則ら歴史研究者を中心とするシンポジウムのほか、本多勝一と澤地久枝、それぞれを囲んでの座談会の記録が収録されている[22]。この構成から、また中村の報告からも推測できるように、ノンフィクション作家やジャーナリストなどによるすぐれたオーラル・ヒストリーの作品が相次いで出版され、やや後追い的に歴史研究者の関心が惹起されたようである。ただし中村には、明治・大正時代の女工や坑夫、小作人の苛酷な生活を、聞き書きによって掘り起こした『労働者と農民』(1976年)[23]という先駆的業績があった。最近、2006年に『歴史学研究』は再度特集を組んでいる。そこでは、方法論に関して社会学者桜井厚の論考を最初に掲載しているものの、清水透や大門正克、前川佳遠理、中尾知代ら歴史学分野でオーラル・ヒストリーの具体的な成果を発表した研究者が自らの経験をふまえて方法論や可能性を論じている。20年のあいだに研究者の層が厚くなったことと理論的な考察が深められたことがわかる[24]。

またトンプソンも指摘しているように、公的文書・史料に残りにくい女性の経験、労働や家族生活の歴史を明らかにするにはオーラル・ヒストリーがきわめて有効であり、欧米同様にわが国でも、女性史の分野で注目すべき成果があげられつつある。2004年には『歴史学評論』において特集「オーラル・ヒストリーと女性史—沈黙の扉を開く—」が企画された[25]。トンプソンのインタヴューからはじまって、戦争体験やアイヌ史などに関する女性史の諸論考を通じて、オーラル・ヒストリーの発展の方向性が探られている。他方、上野千鶴子『ナショナリズムとジェンダー』は、フェミニズムの観点から元「従軍慰安婦」による証言の真実性について論じた[26]。

またオーラル・ヒストリーという術語は用いていないが、隣接する領域として、人類学者川田順造による無文字社会の研究のインパクトも看過できないであろう[27]。とりわけその口頭伝承論は、これまで紹介した民衆史や戦争体験史とは異なる次元で文字社会、近代社会を相対化する視点を提供した。またインディオ史の清水透や、アボリジニの「ラディカル・オーラル・ヒストリー」を著した保苅実は、フィールドワークとコミュニケーションそのものを歴史叙述のなかに取り込みながら、歴史の真実性をめぐって重要な問題提起をおこなっている[28]。

文字をもたない社会において、口頭伝承や語りが文化の継承に重要な役割を果たしていたことはいうまでもない。しかし、ヨーロッパや日本など文字を有した社会においても、とくに民衆の世界では口承の文化の比重が大きかったことが知られている。そこで次に、宮澤康人のいう「大人と子供の関係史」に示唆を得ながら、筆者の専門とする近代フランス農村史における口承文化のあり様にも一瞥を加えておきたい。

2　「大人と子供の関係史」とオーラル・ヒストリー

(1)「大人と子供の関係史」

「子供はいつから、大人にとってこんなに遠い存在に

なってしまったのだろうか。それはまたなぜなのか。

もともとそうであったのか、それとも、これは、特殊に近代の出来事であろうか。あるいは、〈子供〉・〈大人〉という二項対立の図式そのものが近代の産物であり、それにとらわれているために、子供が遠い存在に見えてしまうだけなのか。それとも、実態の根底のレベルで、もっと深刻な事態が進行しているのだろうか。

こういった疑問に、「解答」を与えてしまうのでなく、さらに深く問いかけていくにも、多様な方法があるにちがいない。もちろん、いわゆる心理学や社会学の方法がある。しかし、微視的な心理学の視点からではなく、また短期的な社会学の視点でもなく、巨視的で長期的な歴史の視点から、この疑問を掘り下げるいきかたもある。その方法にとって、〈大人と子供の関係史〉という認識枠組みは、有効性を発揮するのではないだろうか。[29]」

宮澤康人は、フィリップ・アリエスやロイド・ドゥモースの心性史・子供史研究に触発され、近代市民社会の「大人と子供の関係」を相対化しつつ、教育史の読み直しを提唱した。本稿との関連でいえば、西洋近代社会において「子供の家族への囲い込みと、学校への囲い込み」によって、子供の育成が「地域社会の人間関係（共同体関係）」から切り離されていった点に関する指摘が重要である[30]。

筆者の専門とする近代フランス農村史においても、ほぼ同様のプロセスが展開したといってよい。ここでは、共同体的な人間関係の一例として「夜の集いveillée」の慣行にふれておきたい。

(2) 近代フランス農村における「夜の集い」と口承文化

フランス農村では中世以来「夜の集い」と呼ばれる慣行がおこなわれていたことが知られている。「夜の集い」とは、近隣の老若男女が１軒の家に集い、薪や灯火の節約をかねて、冬の夜長をともに過ごす慣行で、団欒のみならず、糸紡ぎや農具の手入れなどさまざまな手仕事の場でもあった〔図１参照〕。この慣行について論じた文献は多いが、ここでとりあげるのは、農村での子供時代を回想した二人の自伝である。

① マルタン・ナド『ある出稼石工の回想』

マルタン・ナドは、フランス中部リムーザン地方クルーズ県で1815年に生まれた。パリへの出稼ぎ石工であった父親にならい、ナドも石工としての修業を積んだ。一方で読み書きや建築に関する基礎知識を習得し、その知識を活用して石工仲間に教育したり、共和派の政治結社に加盟したりで次第に声望を得て、第二共和政下1849年に国民議会議員に選出された。その後、第二帝政期の亡命生活を経て、クルーズ県知事や議員になり、1898年に亡くなった。彼の自伝『ある出稼石工の回想』(1895年)は、19世紀フランス社会史の第一級の史料としてよく知られ、わが国でも喜安朗によって翻訳が出されている[31]。

ナドによる「夜の集い」の描写は生彩に富んでおり、19世紀前半の農村における文化伝承のあり方を知る上でも貴重である。該当箇所を引用しよう。

「私たちの夜の集いは、いつもきまった家で一人の老女を中心にしていて、その老女の話すことをみんなは一心になって、大変な敬意をいだきながら耳をかたむけたものである。

図１　夜の集い（J.-J. ボワッシュの版画。1780年頃）
出　典：André Burguiére, *Paysages et paysans : les campagnes européennes du Xe au XXe siècle* (Paris, 1991), p. 187.

このように、その語る言葉に権威のあった老女はフウエスゥヌ婆さんといったのだが、村の産婆であり、私たちの誰もが生まれるときに、母親の手助けをした人であった。彼女はあらゆる植物の特性を知っていた。私たちの村にはとくに彼女のほかに病人を看る医者などはいなかったのである。

彼女の話にとくに異をとなえる者などはいなかったから、数年前に死んだピエールだのポールだのという人物が、かつての隣人たちに会いに帰ってきた、そしてだれそれは天国に、だれそれは地獄にいるなどと、あの世のことを伝えたというような話を、少しも動ずることなく確かなこととして語っていた。

彼女は狼男を追いまわしたということで、人びとのあいだに知られるようになっていた人物たちや、狼男を腕力でうち倒した人物たちの名前を教えてくれた。

幽霊にまつわる怪談などには、どこか真実味があった。［中略］

こうした夜の集いが終わって外に出るときには、私たちはえらく恐怖にとりつかれてしまっていて、家に連れられて帰るのに手をつないでもらわなければならなかったほどである。

恐怖は家に帰ってからも続いていた。母親は、しばしばわたしの枕元にやってきて腰をおろし、わたしがまどろむまで話しかけていてくれたものである。[32]」

ナドの幼少期の記憶に鮮明に残っていたこの「夜の集い」の情景から、老年の女性が語り手を務めたこと、幽霊話などとからめて村の先祖の歴史が語られていたこと、語り手の老女の話に敬意をもって耳を傾けたことなどを読み取ることができる。

② ピエール=ジャケズ・エリアス『誇りという馬』[33]

つぎに紹介するのは、時代がくだり1920年代の西部ブルターニュ地方フィニステール県の農村に関する自伝である。著者のピエール=ジャケズ・エリアスは、1914年

にバス=ブルターニュ地方のフィニステール県南部の村に生まれた。カンペールのリセからレンヌ大学に進学して、フィニステール師範学校の古典学の教授となった。公教育を支援する民間団体である教育同盟の民俗学全国委員会の委員長も務め、ブレイス語（ブルトン語）のラジオ番組を担当したりしながら、15年の歳月をかけて『誇りという馬』を執筆した。すぐれたブルターニュ民俗誌でもある同書は1975年に出版され、売り上げは200万部に上ったといわれる。このエリアスの自伝においても、農村社会における口承文化の役割が随所に述べられている。

エリアスの両親は結婚後、妻方のル=ゴフ家に住んだ。そしてピエール=ジャケズは、両家の祖父から農民として生きていくために必要な知識や技法、単に農作業にかかわることだけでなく、まさに農民の世界全般についてじつに多くのことを学んだ。『誇りという馬』という書名も、祖父アラン・ル=ゴフから聞かされた次の言葉から採られている。「貧乏で、代わりの馬が買えなくたって、俺の家畜小屋の囲いにはいつも誇りという馬がいる。」祖父と同じ名の先祖アラン・ル=ゴフの語ったとされるこの言葉には、農民の誇りが雄弁に表明されているといえよう。

この先祖の話をするときに、祖父アラン・ル=ゴフが決まって添える家族の歴史があった。それは、1675年にブルターニュ地方で起きた農民反乱「赤帽子の乱」（別名、印紙税一揆）で、ル=ゴフ家の先祖が二人も絞首刑に処されたことである。この農民一揆は、ルイ14世の王権が設けた印紙税などの新税、および州の臨時税の重圧に反発して発生し、その過程で領主権を制限する要求まで盛り込まれた「農民綱領」が作成されたことで知られている。反乱鎮圧の責任者であったブルターニュ州総督ショーヌ公は、反乱者に対して苛酷な弾圧を加え、大勢の農民が処刑されたという。縛り首にされた人びとのなかに、ル=ゴフ家の先祖も含まれていたのであろう。同家では、この「呪わしき公爵」「人でなし」に対する憎悪が代々受け継がれていた。

貴族との関係に関しては、もうひとつの印象的な出来事も伝えられていた。先祖アラン・ル=ゴフは19世紀半ば、ギルギファンの館（ランデュデック村）に住むとある侯爵に馬丁として仕えていた。アランが忠節を尽くしたので、両者のあいだには身分を越えた信頼関係が生まれていた。ある日のこと、アランが自分の部屋用に脚付の柱時計を購入した。それを聞いた侯爵が、自分の所有する部屋でもないところにそのような高価な調度を備えたところで何になろう。見栄を張って金の無駄遣いをしている、というような言葉でアランをからかった。怒り心頭に発したアランは、「あなたは、私の時計に対して侯爵なのではない。もしギルギファンのご主人以外の者が同じような発言をしたならば、迷わずそいつの眉間に唾を吐いてやります。」と言い放った。侯爵は色を失い、「アラン・ル=ゴフ、私の眉間に唾を吐いてくれ。」とこたえた。アランは、できるかぎり穏やかに唾を吐きかけた。この出来事のあと、両者の関係は以前とまったく変わらなかったという。

こういった家族や地域の歴史が語り継がれる場が「夜の集い」であった。バス=ブルターニュでは第一次世界大戦後、少なくともエリアスの少年期までは、夜の集いが続けられていたようである。晩方になると、女たちは麻を梳いたり、編み物や刺繍、繕いものをしたりしながら、男たちは馬具や農具を手入れし、木材を加工したり、豆の莢をむいたりしながら、語り手の話に耳を傾けた。使われる言語は、彼らの日常語であるブレイス語であった。エリアスによれば、だれでも語り手になれたわけではなく、記憶力や創作力、表現力など、それなりに才能に恵まれている人物のところに自然に人が集まったという。父方の祖父アラン・エリアスがまさにそのような「話上手」であり、ブルターニュ地方で広く信じられていた死神アンクーに襲われた人物の話や、イギリス王になったブルターニュ人の話など、家族や村人たちが夢中になって聴いたといわれる。

これら二人の自伝からわかるように、近隣に住む多世代の男女が暖炉の周りに集まって、語り手の話に耳を傾ける「夜の集い」は、現代の家族（殊に核家族）と学校に二元化された教育のあり方とは異なる文化継承（ときに文化創造）のモデルであったといってよいであろう。そこでは、オーラル・ヒストリーも含む口承の文化が息づいていた。この慣行は、男性の社交の場となった居酒屋の出現、学校教育の普及にともなう文字文化の浸透と個人的読書（黙読）の一般化、1920年代になるとラジオの普及などの影響を受けて廃れていった。むろん、前提条件として、農村社会の共同体的な結合関係の弛緩、職住分離といった社会的要因も考慮されなくてはならない[34]。

3　オーラル・ヒストリーと教育

すでにふれたとおり、欧米のオーラル・ヒストリーは地域史、コミュニティ史の開拓にもつながっている。ことに「オーラル・ヒストリー・プロジェクト」の名の下に、アメリカやイギリスでは、学校教育に積極的に導入され、歴史教育だけでなく、世代間理解や地域学習にも役立てられている。前節で論じた共同体と口承文化の関係をふまえれば、この動向はいっそう興味深い。つまり、オーラル・ヒストリー・プロジェクトが、口承の方法による、コミュニティ（地域社会）史の掘り起こしと継承をめざすとき、それは、近代化の進展により一旦は希薄になった地域の「大人と子供の関係」（宮澤）を新たなかたちで創り出そうとすることにもなるからである。この点に関して、P. トンプソンは次のようにいっている。

「オーラル・ヒストリーは、プロジェクト研究に特に適している。これはオーラル・ヒストリーの方法それ自体が、創造的かつ協力的な性格をもっていることによる。もちろんいったん収集された口述の証拠は、図書館でしか研究しない伝統的な研究者にも使われうる。しかし、

図書館に収集された口述の証拠を使うだけでは、オーラル・ヒストリーの主要な長所――調査地域にでかけていくことによって、新しい証拠をまさにそれにふさわしいところに位置づけることが可能であるという点――を見失うことになる。フィールドワークを成功させるためには、学問的な知識だけではなく、インフォーマントと一緒に研究するという人間的で社会的なスキルを要する。［中略］オーラル・ヒストリー・プロジェクトは、必ずしも、年齢の高い者や専門家、文章力のある者だけがもっているとは言えない幅広い技術を要求する、だから、オーラル・ヒストリー・プロジェクトは、インフォーマントと研究者の間における、より対等な関係に基づく協力関係を可能にするのである。オーラル・ヒストリー・プロジェクトは、たんに知的な刺激を与えるだけでなく、時には他の人々の人生に深く入り込むことによって深く心を動かされるような経験をさせてくれる。また、オーラル・ヒストリー・プロジェクトは、どこでもできる。どんな共同体でも、そこでの多面的な歴史を描くことが可能なのである。共同体内の仕事、家族、人生、そして社会的な関係などの歴史が、描かれるのを待っているのである。

オーラル・ヒストリー・プロジェクトは、さまざまな文脈の中でおこなわれうるものである。個人、あるいはグループの企画としても立ち上げることができるし、学校、専門学校、そして大学でもできる。あるいは、成人教育の場でも、学習グループでも、博物館やコミュニティーセンターでもできるものである。オーラル・ヒストリー・グループは、どんな人々をも巻き込んでおこなわれるものである。学童たち、失業中の若者たち、働く親たち、あるいは引退したお年寄りたちにも可能である。[35]」〔下線は槇原〕

「コミュニティのなかには、コミュニティとしては脆弱になっているところがある。街のなかにおける近隣や田舎が何らかの点で、たとえば農業の変化などで、脅かされていることがある。しかし、オーラル・ヒストリー・プロジェクトを進行させることで、人々に自分の住む場所の歴史への関心を呼び起こさせ、その場所の優れているところを認識させることができる。これまでいくつもそういう事例があった。[36]」

これらのトンプソンの主張において、オーラル・ヒストリー・プロジェクトは、地域史の掘り起こしというだけでなく、コミュニティの構成員＝住民の相互理解と関係づくり、地域の理解に寄与することが期待されている。トンプソンは、オーラル・ヒストリーの教育的な効果にも論及している。それをまとめると、次のようになる。

①調べる技能：インタヴューから文献調査へと向かうこと
②言語技能の発達：適切な質問文の作成、表現力の育成、および、人の話を聞いて、それを理解し、解釈すること
③機器を使いこなす技術、資料を展示する技術
④基本的な社会的スキル：コミュニケーション能力、ほかの人の話を聞くこと、話し手を気楽にさせること、話を聞くこつや忍耐

図２　聞き取りをおこなうレイバン・ギャップ校の生徒たち
出典：Eliot Wigginton, *Sometimes a Shining Moment: The Foxfire Experience* (New York, 1986), n. p.

「このようにして子どもたちは、他の人を理解したり共感を感じたり、またさまざまな人生への価値や態度に直面し、それらが対立していることを学ぶ。[37]」

アメリカでは、現場の教師が手軽に参照できるようなオーラル・ヒストリーの実践例やマニュアルも出版されている[38]。小川浩之は、南部ジョージア州の中等学校レイバン・ギャップ校の実践"Foxfire"（狐火）について詳しく紹介している[39]。そこでもオーラル・ヒストリー・プロジェクトが、アパラチア南部地方の丸木小屋やキルトなどの伝統文化やそれを伝える老年世代に対する理解を深め、コミュニケーション、取材・調査、文章化などの技能を生徒たちに習得させる上で、非常に効果的であったことが指摘されている。また、大学のアメリカ史概説の授業でオーラル・ヒストリーを活用したパッティ・ディロンによれば、「伝統的な教授資料――教室の講義、教科書、ビデオ、その他の補助教材――は、学生に歴史的変化の基礎的な事実や区分を教えてくれるが、しばしばより広域的で、全国的な動向と個人的な生活を関連づけたり、時代を通して個人の認識や態度がいかに変化したのか、あるいは変わらなかったのかをうまく示せない。オーラル・ヒストリーは、学生がそのような関連づけを行うための貴重な手段を提供する。」「オーラル・インタヴューは大切で効果的な教訓を学ぶのをたすける。つまり、私たちと同じような人びとが歴史をつくっていることを。」と述べている[40]。

このような欧米の状況に比べると、わが国においてはなおも自覚的な取り組みは稀であるといってよいであろう。あえて「自覚的な」と付けたのは、おそらく異世代への聞き取りは、とくに社会科教育において割合よく利用されている方法ではないかと思われるからである。「地域の高齢者の方に、戦時下の生活について、お話を聞いてみましょう」などと聞き取りを促す工夫をしている教科書もある[41]。しかし、トンプソンらが提唱しているような、テーマの選択からグループの編成、機器の準備と用法、インタヴューの方法、記録（を使った記事・論文）

の発表方法、保管や出版まで組織的なプロジェクトとしてオーラル・ヒストリーを実践した例はほとんどないのではなかろうか。

トンプソンの指導の下で博士論文を執筆した酒井順子は、近著のなかで「オーラル・ヒストリー・プロジェクトを立ち上げよう」と題した章を設け、その方法を具体的に、詳しく解説している[42]。さらに御厨や中村らの論も参考にすれば、オーラル・ヒストリー・プロジェクトについて自分なりの構想を練ることはそう難しくはないように思われる。しかし、仮に彼らの著作に触発される教師がいたとしても、多忙な現場において一人で実施するのは不可能に近いはずである。口述史料の収集に必要な道具、機器も準備しなくてはならない。教師相互の協力関係に加えて、知識を提供し、聞き取りのノウハウや解釈の仕方等について助言する大学教員＝研究者、そしてインフォーマント側となる市民の理解と協力も不可欠であろう。オーラル・ヒストリーを教育に活かすためには、まさにプロジェクトとして組織されなくてはならないだろう。

結びにかえて

前述したとおり、先行研究によって論じられるオーラル・ヒストリーの目的、定義や方法にはそれぞれに特色があり、相異なる主張もみられる。とはいえ、彼らのおかげで、わが国でもオーラル・ヒストリーの方法が研究者のみならず、市民のあいだにも徐々に浸透しつつあるのは間違いない。一方で、学校に集中化されすぎた教育機能を、もう一度地域社会に還元する必要性についても様々に議論されている。わが国でも、オーラル・ヒストリーをより本格的に学校教育に導入する方途が探られるべきときが来ているのではなかろうか。

もちろん、課題は少なくない。上述のようにプロジェクトの組織化が望ましいとはいえ、カリキュラムの柔軟性に乏しく、教師の裁量も限られているわが国の学校教育において本格的なプロジェクトを組み込む余地があるのかどうか。他方で、本稿で取り上げなかった口述史料の評価の問題もある。たとえば、記述史料とは異なる、あるいは記述史料に見いだせない「史実」を語る証言＝口述史料をどう扱うのか。テーマは異なるが、保苅にしろ、中村にしろ、あるいは上野にしろ、語られた歴史の真実性に真摯に向き合うことの重要性を説く点では一致している。しかし、教師と生徒の関係が前提となる教育の場においては、「事実」をどう教えるかは容易ならざる問題となろう。

本稿は、「オーラル・ヒストリーと教育」という筆者にとって未知（テラ・インコグニタ）なる領域に足を踏み入れるために、とりあえず踏査の目安になりそうな箇所に数本の標識を立ててみたにすぎない。これからどの方向に歩みを進めるのかについては、それこそ共同研究のメリットを生かして多様な視点から検討していきたい。

注

(1) 本稿では、論集における他分野との関係から、ひとまず「歴史学」を自称するが、実際には、筆者の専門である西洋史の動向や事例の参照が多くなる点をお断りする。

(2) カール・マンハイム『世代・競争』誠信書房、1958年。（Karl Mannheim, "Das Problem der Generationen", 1929; id., "Die Bedeutung der Konkurrenz im Gebiete des Geistigen", 1929.）村上宏昭「『世代』概念をめぐる一考察—世代史研究の拡張へ向けて—」『歴史家協会年報』第3号、2007年。

(3) たとえば、田村栄子『若き教養市民層とナチズム：ドイツ青年・学生運動の思想の社会史』名古屋大学出版会、1996年。また、『歴史評論』（特集「歴史の中の世代」）698号、2008年を参照。

(4) 前川和也編著『コミュニケーションの社会史』ミネルヴァ書房、2001年。佐藤卓己『現代メディア史』岩波書店、1998年。D. クローリー, P. ヘイヤー（林進, 大久保公雄訳）『歴史のなかのコミュニケーション：メディア革命の社会文化史』新曜社、1995年。（D. Crowley & P. Heyer, *Communication in History : Technology, Culture, Society* (London, 1991).）

(5) 村上宏昭「ヴァイマル共和国における『大戦の語り』と世代間抗争—『前線世代』の戦争文学—」『ゲシヒテ』第1号、2008年。

(6) 宮澤康人『大人と子供の関係史序説—教育学と歴史的方法』柏書房、1998年。

(7) 広川禎秀「オーラル・ヒストリー」『歴史学事典』第6巻（歴史学の方法）、弘文堂、1998年、55頁。

(8) グイン・プリンス「オーラル・ヒストリー」、P. バーク編『ニュー・ヒストリーの現在—歴史叙述の新しい展望—』人文書院、1996年、131頁。(Gwyn Prins,"Oral History", Peter Burke, ed., *New Perspectives on Historical Writing* (Cambridge, 1991).)

(9) 酒井順子『市民のオーラル・ヒストリー　歴史を書く力を取り戻す』かわさき市民アカデミー出版部、2008年、26頁。

(10) 御厨貴『オーラル・ヒストリー：現代史のための口述記録』中央公論新社、2002年、5頁。また、御厨貴編『オーラル・ヒストリー入門』（岩波書店、2007年）でも同様の定義がなされている。

(11) 御厨『オーラル・ヒストリー』、200, 201頁。

(12) 柳田国男『遠野物語・山の人生』岩波書店、1976年〔『遠野物語』初版は1910年。〕など。宮本常一『忘れられた日本人』未来社、1960年など。

(13) 御厨『オーラル・ヒストリー』、188頁。

(14) ポール・トンプソン『記憶から歴史へ—オーラル・ヒストリーの世界』青木書店、2002年、49頁。（Paul Thompson, *The Voice of the Past: Oral History* (Oxford, 1978, 3rd. ed., 2000.)）

(15)トンプソン、前掲書。とくに第2章、第3章。 同「オーラル・ヒストリーの可能性を開くために」『歴史評論』648号、2004年。プリンス、前掲論文。
(16)プリンス、前掲論文、132頁。
(17)Jan Vansina, *Oral Tradition: A Study in Historical Methodology* (London, 1961).
(18)コロンビア大学オーラルヒストリー・コレクションは、国立国会図書館の憲政資料室にも所蔵されている。同資料室のウェブ・サイトを参照。
(19)イギリス・オーラル・ヒストリー学会2005年度大会は、第二次世界大戦の終戦60周年を記念して、戦争の記憶の変化をテーマにした国際大会として開催された。国単位の戦争の記憶を国境を越えて共有しようとする試みとして注目される。Mary Ingham, "Using the War: Changing Memories of World War Two", *History Workshop Journal*, No. 61, 2006, pp. 295-298.
(20)油井大三郎「世界戦争の中のアジア・太平洋戦争」『なぜ、いまアジア・太平洋戦争か』岩波講座アジア・太平洋戦争、2006年、所収、238頁。
(21)市民による聞き取りの成果が公刊されたものとして、たとえば被爆体験に関しては、神田三亀男編『原爆に夫を奪われて—広島の農婦たちの証言』岩波書店、1982年や関千枝子『広島第二県女二年西組』筑摩書房、1985年などを参照。また、浜田孝志『満州に連れ出された女学生：島根県立大東高等女学校皇国農村学徒報国隊の記録』（かもがわ出版、1996年）は、アジア・太平洋戦争末期に「満州に連れ出された」地方農村の女学生の体験を、証言をもとに跡づけた貴重な記録である。広島、長崎の被爆体験のほか、沖縄戦や満州移民の体験者の聞き取りをおこなった中村政則の著書、『昭和の記憶を掘り起こす—沖縄、満州、ヒロシマ、ナガサキの極限状況』小学館、2008年の巻末に、戦争体験のオーラル・ヒストリーの主だった作品や史料集の一覧がまとめられている。同書、278-281頁。
(22)『歴史学研究』（特集／オーラル・ヒストリー—その意味と方法と現在—）568号、1987年。
(23)中村政則『労働者と農民』（日本の歴史29）小学館、1976年。
(24)『歴史学研究』（小特集／方法としての「オーラル・ヒストリー」再考（Ⅰ）—オーラル・ヒストリーへの接近—）811号、2006年。同誌、（小特集／方法としての「オーラル・ヒストリー」再考（Ⅱ）—オーラル・ヒストリーの実践—）813号、2006年。
(25)『歴史評論』（特集「オーラル・ヒストリーと女性史－沈黙の扉を開く－」）648号、2004年。
(26)上野千鶴子『ナショナリズムとジェンダー』青土社、1998年、とくに97-144頁。
(27)川田順造『無文字社会の歴史：西アフリカ・モシ族の事例を中心に』岩波書店、1976年。
(28)清水透『エル・チチョンの怒り：メキシコにおける近代とアイデンティティ』東京大学出版会、1988年。保苅実『ラディカル・オーラル・ヒストリー：オーストラリア先住民アボリジニの歴史実践』御茶の水書房、2004年。
(29)宮澤、前掲書、1-3頁。
(30)前掲、184-191頁。
(31)マルタン・ナド『ある出稼石工の回想』岩波書店、1997年。（Martin Nadaud, *Mémoires de Léonard : ancien garçon maçon* (Paris, 1895).）
(32)前掲、20, 21頁。
(33)Pierre-Jakez Hélias, *Le Cheval d'orgueil*, Paris, 1975, rééd., 2001.『誇りという馬』に関する記述は、拙稿「農民心性における「自尊」意識の変化—戦間期バス=ブルターニュ地方に関する試論的考察—」『歴史学研究』848号、2008年の一部をほぼそのまま載せている。引用の注記については、上記拙稿を参照のこと。
(34)夜の集いについては、槇原茂『近代フランス農村の変貌—アソシアシオンの社会史—』（刀水書房、2002年）第４章も参照。
(35)トンプソン、前掲書、335, 336頁。
(36)トンプソン「ポール・トンプソン氏に聞くオーラル・ヒストリーの可能性を開くために」『歴史評論』648号、2004年、４頁。
(37)トンプソン『記憶から歴史へ』、338-340頁。
(38)たとえば、以下を参照。James Hoopes, *Oral History. An Introduction for Students* (Chapell Hill, 1979). D.-S. Dickson et als., *The Oral History Project. Connecting Students to Their Community, Grades 4-8* (Portsmouth, 2006).
(39)小川浩之「アメリカの地域学習におけるオーラル・ヒストリーの研究—Georgia州Ruban Countyにおける"Foxfire"magazineを事例として—」『筑波社会科研究』第12号、1993年。また、トンプソン、前掲書、344-352頁。
(40)Dillon, "Teaching the Past through Oral History", *The Journal of American History*, pp. 602, 605.
(41)五味文彦他『新編新しい社会　歴史』東京書籍、2006年、193頁。また、黒田日出男他『社会科　中学生の歴史』帝国書院、2006年、218頁。
(42)酒井、前掲書、63-82頁。

《追記》 脱稿後に、以下の特集の出版を知った。本稿で論じた日本のオーラル・ヒストリー研究の動向をより深く知るために重要である。また、韓国の研究動向に関する論文も収められている。特集「社会科学研究とオーラル・ヒストリー(1)(2)(3)」『大原社会問題研究所雑誌』585, 588, 589号、2007年。